

丹波教授が号泣，下山順一郎の葬儀(続)

薬学雑誌 1912年度(明治45年) 204頁

先月、薬界元勲、もと本会副会頭、東京帝国大学医科大学教授、下山順一郎の死去の様子を紹介した。明治22年薬学会で副会頭職を置くことが決まって以来、毎年選挙をするのだが、常に7~9割の票を集め、長井会頭とともに薬学をリードしていた。その大きさは葬儀の様子でしのばれる。

葬儀委員長は丹波敬三。下山は富士派日蓮宗の熱心な帰依者で、戒名は経文中の薬品に関する語句を採ったというが、叢林院殿一雨日潤居士。

2月16日午後正1時、下根岸の同邸より出棺。前日の降雨のため道路泥濘甚だしきに拘らず、稀有の盛典にして会葬者1,700余名に達し、葬列十余町に亘る。先頭は大学助手たる4学士、同薬学科学学生の一隊これに次ぎ、数120余りに及ぶ造花、生花、花輪、放鳥の列が続いた。勲章は近藤博士ら4人が捧持、棺側には長井、丹波、丹羽、田原、山田、高橋(三)、池口の7薬博、羽田一等陸軍薬劑正、高橋順太郎、近藤継繁両医学士らが徒歩扈從。(中略)列の殿として東京薬学

校生徒一隊、神谷学士の指揮のもと随従せり。3~4kmほど離れた本所常泉寺に行列が着いたのは午後2時40分だった。

弔詞70、弔電300数十通。弔詞は浜尾帝大総長、台湾総督時代に下山と親しんだ後藤新平、薬劑師会代表の資生堂福原有信ら11人だけ朗読してもらった。友人代表の丹波に至っては、40有余年、つねに進退をともした間柄とて、朗読半ばにいたりて感極まり遂に流涕嗚咽、読む能はず。満場また1人の泣かざるものなかりき。

このあと残りの弔詞は朗読省略、仏前に捧呈するのみとなった。しかし、時間切迫のため11人まで行ってから残り48本は、高橋(秀)博士がその連名を朗読して一括捧呈せり。葬儀おわりて、棺は町屋の火葬場に送られ、同夜ついに一片の煙と化す。

時は100年近く流れ、東大薬学部の北東にある偉人の胸像も歴史のかなた、落葉と藪に埋まった。かつて、たまに物好きが靴滑る急斜面を枝、蔓掴んで這い上がり拝見しようにも、草、雑木に阻まれ近づけない状態であったのが、2008年、何十年ぶりかで整備され、拝見できるようになったのは喜ばしい。

小林 力